記実と忌日（二）

西をさむ

徒行ならば杖つき坂を落馬哉　　芭蕉

江戸から京に向かう途次、東海道は七里の渡（別街道もあった）で熱田から桑名に着きます。そうして四日市へと歩を進めます。五十年程前には四日市公害の仕業で煙突からもくもくと黒くて異様な臭いをまき散らしていましたが、芭蕉さんが此の辺りを旅していた時代にはその様な景色は何処にも見当たらなくて、葦原の国の如、幾すじもの川が流れていて葦が生い茂っていました。そうした中、芭蕉さんは東海道と伊勢街道の分岐点、四日市市の南の端、日永の追分に着きました。

此の時、桑名で焼き蛤を食べたかどうかは知りませんが、芭蕉さんは二見には行かず右に行くのでした。すると間も無く急な登り坂に行き当たりました。芭蕉さんはこの時、疲れていたのか年の所為か、駕籠や馬で旅をしていました。そうしてこの坂道で落馬してしまいます。おそらく、馬子には馬鹿にされるやら叱られるやらで照れ臭かったのでしょう。この坂道の名前が〝杖つき坂〟だったので、「杖をついて歩いて上ればこんな事には為らなかった」と言う句を詠んだのです。でも、この句、何処か引っ掛かりませんか。そう、季語が有りませんね。でも芭蕉さんはボ～ッと生きてはいなかったので、ちゃんと知っていたのです。本人が「此の句、季なし」と言っています。これで無季の句であっても俳句と見做される根拠が見付かりました。

芭蕉さんの句には、この句の様に下五に「哉（かな）」が多く使われています。それと上五に「や」の切字が多く見受けられます。其れはそうでしょう。芭蕉さん自ら、「四十八文字すべて切字」と言っているのですから。ん？　四十七文字かも知れません。又、字余りは上五に据えよと誰かが言っていましたが、これは芭蕉さんの次の句を目にして唱えられ

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

たのかもしれません。

おもしろうてやがてかなしき鵜舟哉　芭蕉

話を元に戻しますが、八時間耐久レースで有名な鈴鹿サーキットの在る鈴鹿市の庄野宿は、日本武尊が病に倒れた所と言い伝えられています。近くの加佐登神社には尊が最後まで持っていた笠と杖が御神体として祀られています。杖つき坂は短い道程ですが、当時は相当厳しい坂道だった様です。そして、隣の亀山市に入ると、日本武尊が祀られている能褒野（のぼの）神社があります。因みに三重県が三重と成った訳はご存知でしょうか。これも日本武尊の伝説に係わっています。杖つき坂で歩き疲れて、腰が三重にも曲がってしまったからだそうです。

松尾芭蕉は、陰暦十月十二日、五十一歳でこの世の旅を終えました。

この文章処どころは記実かな？　　をさむ

旅にやんで夢は枯野をかけめぐる淀川上り義仲寺までと　　をさむ

芭蕉さん御免なさい。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。